

# 中国における法華經疏の研究史について

菅野博史

## 序

### (1) 中国仏教と經疏

中国では二世紀半ば頃から仏典の漢訳が開始され、中国人が中国語によって仏教を学ぶことができるようになった。仏典は大きく分けると經・律・論の三つに分けられるが、しだいに仏教の研究が進むと、經・律・論のそれぞれに対する注釈書が制作されるようになった。すでに中国では儒教古典に対する注釈の伝統があり、その伝統が仏典の注釈書の制作を促したのかもしれない。南北朝時代から隋唐時代にかけて盛んになった仏典の注釈はかえって同時代の儒教古典の注釈を質量ともに凌駕するほどであった。

仏典の中でも、經が釈尊の思想を学ぶ上で最良のものであったから、最も熱心に經の注釈がなされるようになった。また、すでに述べたように、中国の注釈の伝統の影響を受けたと思われるが、中国人仏教徒は自己の思想を展開する場合、必ずしも独立の書を執筆するのではなく、經の注釈という形式を墨守する中で、自己の思想を表明するという傾向が強く

見られたのである。

たとえば、隋の三大法師と言われる淨影寺慧遠（五二二—五九二）、天台大師智顗（五三八—五九七）、嘉祥大師吉藏（五四九—六三三）の著作において、經の注釈書の占める分量はかなりの割合であり、吉藏の場合を具体的に調べると、二十五部の著作のうち、十八部が經の注釈書であり、『華嚴經』『維摩經』『勝鬘經』『金光明經』『無量壽經』『觀無量壽經』『大品般若經』『金剛般若經』『仁王般若經』『法華經』『涅槃經』の十一の大乘經典に対する注釈書である。また、隋代頃までは、三大法師のように、一人で多くの經典の注釈書を著わす点が一つの特色となっている。換言すれば、どれか特定の經典を選択するのではなく、吉藏の場合に挙げたような大乘經典の代表的なものに対して、偏りなく取り組む姿勢が見られるのである。

上に述べたように、中国には經典の注釈書が多数存在する。したがって、一つの經典の注釈書が複数存在する場合も少なくなく、ある經典が中国でどのように解釈されていたかという解釈の変遷が研究の課題となるのである。『法華經』もそのような例の典型的なものである。

## （2）中国における法華經疏

『法華經』は代表的な大乘經典の一つとして、インド、中国、日本において広く人々の信仰を集めてきたことは言うまでもないが、中国には二八六年、竺法護（生年およそ二三〇年代で、七十八歳示寂）によって『正法華經』として漢訳された。しかし、この經典は訳文が難解であること、そして、より根本的には当時の仏教学の中心が般若教学であったこと等の理由によって、それほど仏教界の注目を喚起することはなかったと言える。ところが、時代が下って鳩摩羅什（三四四—四一三、あるいは三五〇—四〇九）によって、四〇六年、『妙法蓮華經』が訳出されるに及んで、ようやく時代の脚光を浴びるようになり、多くの人によって研究されるようになった。

今、現存する『法華經』の注釈書を挙げると、まず最古のものとして、竺道生（三五五頃—四三四）の『妙法蓮花經疏』がある。道生は鳩摩羅什の門下で、闡提成仏説（法顯將來の『六卷泥洹經』は一闡提の成仏には否定的であったが、それにもかかわらず、道生は經に背くものと非難されながら、曇無讖訳『大般涅槃經』四十卷の思想を先取りして、一闡提も仏性を有し終には成仏するという説を主張）や頓悟説（仏教の真理は不可分、唯一なるものであるから、その真理を部分的、段階的に悟るという漸悟説を批判し、修行の段階的進展は認められるものの、こと悟りに関しては、悟るか悟らないかのいずれかであることを主張）によつて、その獨創的かつ透徹した仏教理解を高く評価された人物である。

次に、光宅寺法雲（四六七—五二九）の『法華義記』（法雲の親撰ではなく、弟子が筆録したもの）がある。法雲は、開善寺智蔵（四五八—五二二）や莊嚴寺僧旻（四六七—五二七）とともに梁の三大法師と呼ばれた人で、その法華学は南北朝時代（江南において成立した宋王朝（四二〇—四七九）と華北を統一した北魏王朝が拮抗併立した五世紀前半から、隋の文帝によつて南北が統一される西暦五八九年までの時代）を通じて第一級のものであった。天台大師智顗もその著『法華玄義』において、妙法の解釈について、「昔から今までのさまざまな解釈について、世間では光宅寺法雲をもっともすぐれていると見なしている」（大正三三・六九二下）という見地から、古い時代の解釈を法雲に代表させて、これを批判しているほどである。

次に、その智顗には、『法華玄義』のほかに、法華經の随文解釈である『法華文句』があるが、実はこの二著は智顗の親撰ではなく、弟子の章安大師灌頂（五六—一六三）が智顗の講義を筆録したものを、後に整理して完成したものであると言われている。その成立に関しては、後に紹介するように平井俊榮氏の画期的な研究がある。

次に、三論学派（龍樹の『中論』『十二門論』、その弟子の提婆の『百論』の三論を重視する学派）の大成者である嘉祥大師吉蔵には、『法華玄論』『法華義疏』『法華遊意』『法華統略』があり、最も多くの『法華經』の注釈書を著わしているのである。最後に、法相宗の慈恩大師基（六三一—六八二）には『法華玄賛』がある。

これらの人々はいずれも中国仏教史上著名な仏教徒であり、それぞれの宗教的、学問的立場から『法華經』の研究に取

り組んだのである。

## 本論 中国における法華經疏の研究史

上に挙げた代表的な法華經疏に対するこれまでの研究を紹介する。本稿では単行本として刊行された研究のみを紹介する。

(1) 山川智広『法華思想史上の日蓮聖人』(新潮社、一九三四年／浄妙全集刊行会、一九七八年)

本書の目的は日蓮の法華思想史上における位置づけと、その思想・宗教に対する考察にある。前者の課題を解決するために、インドにおける法華經思想と中国における法華經思想とを考察している。本稿に関連するものは、第一部・第三編の中国における法華經思想の部分である。

その第三編の内容目次を紹介すると次のようである。

### 第一章 法華正系思想の確立以前

#### 第一節 竺法護及びその門流の法華經觀

#### 第二節 鳩摩羅什及びその門流の法華經觀

#### 第三節 光宅寺法雲の法華經觀

#### 第四節 嘉祥大師吉藏の法華經觀

### 第二章 法華正系思想の確立

#### 第一節 天台大師智顗の法華經觀

## 第二節 妙樂大師湛然の法華經觀

## 第三節 四明尊者知礼の法華經觀

## 第三章 法華傍系思想の台頭

## 第一節 慈恩大師窺基の法華經觀

## 第二節 賢首大師法藏及び清涼大師澄觀の法華經觀

## 第三節 三藏善無畏及び大広智三藏不空の法華經觀

目次を一覧して分かるように、山川智応氏は智顗および、その門流の法華經觀を「法華經」の正統な解釈と認め、智顗以前の道生、法雲、吉藏などを「法華正系思想の確立以前」として一括して扱い、また智顗の法華經觀に反対する解釈を「法華傍系思想」として一括し、法相宗の基、華嚴宗の法藏、澄觀、密教經典の翻譯家の善無畏三藏、不空三藏などの解釈を扱っている。山川氏が中国の仏教徒の法華經觀を整理する方法の一つの特色は、「法華經」二十八品の各品の重要な教義に対する各人の解釈を見ていくことである。

山川氏が中国におけるさまざまな仏教徒の「法華經」解釈を通覧したことは、彼以前に見られなかった彼の業績であることは認めなければならない。また、多くの思想家の「法華經」解釈に対する山川氏の着眼点や個々の理解には今でも見るべきものがあると思われる。しかし、彼が智顗の解釈を正統視し、その立場から他の解釈を低く評価している点には、智顗とそれ以外の人との客観的な比較を必ずしも經由していない場合もあり、やや行き過ぎの感を否めない。とくに、後述する平井俊榮氏の研究によって、灌頂によってまとめられた「法華玄義」「法華文句」の中に吉藏の法華疏の大きな影響のあることが論証された現在の研究状況においては、山川氏の吉藏に対する研究はすでに時代遅れのものとなっている。また、限られた紙数で大勢の人の「法華經」解釈を扱ったために、全体的に大ざっぱな概論風の叙述になっている。

(2) 日下大癡『台学指針——法華玄義提綱』(興教書院、一九三六年/百華苑、一九七六年)  
本書は『法華玄義』全体の内容を解説したものである。

(3) 塩田義遜『法華教学史の研究』(地方書院、一九六〇年)

本書は山川智応氏の前掲書と同様に、インド、中国、日本にわたる法華思想史を研究したものである。いま、本稿の主題である中国における法華經疏の研究に関連する、「第二編 中国鑽仰史」の内容目次を紹介する。

# 第一章 法華經の漢訳と鑽仰

## 第一節 法華經の漢訳

## 第二節 法華經鑽仰の大観

# 第二章 中国初期の註家

## 第一節 道生の法華經疏

## 第二節 法雲の法華義記

# 第三章 実義開顯時代

## 第一節 南岳慧思の教学

## 第二節 天台智顗の法華三大部

# 第四章 顯教交流時代

## 第一節 三論吉藏の法華經疏

## 第二節 法相窺基の法華玄賛

### 第三節 華嚴元曉の法華宗要

## 第五章 密教交流時代

### 第一節 一行阿闍梨の大日經疏

### 第二節 不空三藏の法華觀智儀軌

目次からも分かるように、智顗の三大部を『法華經』の真実の意義を開顯したものと認めている点は山川氏の前掲書と同じ観点である。それぞれの思想家の法華經觀を要領よく整理している点、現在でも参照に値すると思われるが、全体的に概論風の叙述になっている点はやむをえないであろう。智顗の三大部と吉藏疏との関連については、山川氏の研究に対するのと同じ評価が下される。

### (4) 佐藤哲英『天台大師の研究』（百華苑、一九六一年）

本書は智顗の撰述、または講説と伝えられているすべての著作に対する文献批判を試みたものであり、天台教学研究史上、画期的な研究であった。「第三篇 天台三大部の研究」では、三大部の成立過程を詳しく考察している。『法華玄義』については、吉藏の『法華玄論』との関連、『法華文句』については、吉藏の『法華玄論』『法華義疏』との関連についても指摘しているが、後に紹介する平井氏の批判にもあるように、灌頂が吉藏の法華疏を参照し、下敷きにして『法華文句』を執筆した点の解明がまだ徹底していない欠点がある。

### (5) 横超慧日編著『法華思想』（平樂寺書店、一九六九年）

本書は論文集であり、本稿に関連する論文は、横超慧日の「第一部 第三章 中国における法華思想史」、安藤俊雄の

「第二部 第二章 第一節 法華經と天台教学」である。

前者は、第一節を「鳩摩羅什翻訳時代の法華教学」と題して、鳩摩羅什、僧叡、竺道生、道融、慧観の五人の法華經観をごく簡潔に整理している。これは(7)に紹介する書に詳しい研究が別にあるからである。第三節を「中国における法華經研究」と題して、法雲、吉蔵、智顗、窺基の四人の法華經観を整理している。全体的に概論風の叙述になっている。

(6) 坂本幸男編『法華經の中国的展開』(平樂寺書店、一九七二年)

本書は論文集であり、本稿の主題に関連する論文も多い。関連論文のタイトルのみを左に示す。

第一篇 第一章 坂本幸雄「中国に於ける法華經研究史の研究」

第二篇 第一章 横超慧日「竺道生の法華思想」

第二章 田村芳朗「法雲の法華義記の研究」

第三章 佐藤哲英「智顗の法華玄義・法華文句の研究」

第四章 里見泰穂「吉蔵の法華經玄論について」

第五章 丸山孝雄「吉蔵の法華義疏の研究」

第六章 平川彰「道宣の法華經観」

第七章 勝呂信静「窺基の法華玄賛における法華經解釈」

第八章 日比宣正「法華五百問論の研究」

第九章 水野弘元「戒環の法華經要解の研究」

第十章 浅井円道「智旭の法華經会義等の研究」



(7) 横超慧日『法華思想の研究』(平樂寺書店、一九七五年)

本書は論文集であり、本稿の主題に関連する論文は、「竺道生撰『法華經疏』の研究」と「法華教学における仏身無常説」の二論文である。前者は序論が「竺道生の思想的背景」と題して、

- 一 竺道生の思想的地位
  - 二 東晋時代の正法華經研究
  - 三 江南支遁の仏教学
  - 四 長安道安の仏教学
  - 五 慧遠及び羅什の法華經觀
  - 六 羅什門下の法華經觀
- の六節から成り、本論は「竺道生の法華經疏」と題して、
- 一 本疏の組織と成立の由来
  - 二 教法組織論
  - 三 法華經の帰趣
  - 四 經題解釈
  - 五 一經の分科
  - 六 表現の理解
  - 七 三車説と一乘方便
  - 八 長寿の意義と泥洹經
  - 九 結

の九節から成る。道生の法華經疏に関する最も信頼できる研究として、その後の学者の研究の確かな礎石となったものである。鳩摩羅什とその門下の法華經觀についても、現在なおその価値を失っていないと思われる。

後者の論文は、『法華經』に説かれる仏身は無常の存在であり、大乘の『涅槃經』においてはじめて仏身の永遠性が説かれるとする法雲の説と、それに対する吉蔵、智顗の批判を整理したものである。要領よく整理されており、後の学者の研究の礎石となったが、このテーマについては、現在ではより詳しい研究が発表されている。

(8) 稻荷日宣『法華經一乗思想の研究』(山喜房仏書林、一九七五年)

本書には、中国におけるさまざまな『法華經』の科文(全体の段落分け)の紹介があり、また、一乗に対するさまざまな解釈を紹介している。概論的な内容である。

(9) 丸山孝雄『法華教学研究序説―吉蔵における受容と展開―』(平楽寺書店、一九七八年)

本書は副題にあるとおり、吉蔵の法華疏の研究を集大成したものである。この書が出るまで、吉蔵の法華疏に関する研究はそれほど多くなかったので、後の学者の研究に大いに刺激を与えたと考えられる。序論の第二章に「近代日本における中国法華教学の研究―吉蔵を中心として―」があり、吉蔵の法華疏に対する研究史が整理されていて便利である。

本論は二部に分かれており、第一部は「法華經開會思想の受容と展開」と題して、

第一章 吉蔵の開會思想概観

第二章 『法華玄論』における五乗と三引

第三章 五乗と藥草喩品三草二木

第四章 『法華義疏』における一実二權説と一実三權説

## 第五章 『法華遊意』における三中一と三外一

## 第六章 法華遊意における仏身觀

の六章から成る。

第二部は「法華教学研究上の諸問題」と題して、四章から成るが、本稿の主題に関連する論文は、

## 第二章 吉藏の三時説と後五百歳

## 第三章 中国における末法思想と後五百歳

である。

また、卷末には『法華遊意』の訓読と注が掲載されている。

## (10) 平井俊榮『法華文句の成立に関する研究』(春秋社、一九八五年)

本書は、天台三大部の一つに数えられる『法華文句』が、智顗亡き後、弟子の灌頂によって、吉藏の『法華玄論』『法華義疏』に全面的に依拠し、これを参照し下敷きにして書かれたことを論証することを目的としている。智顗の著作に対する文献批判的研究は上に紹介した佐藤哲英によって開始されたが、依然として護教的な立場を脱却していない面も見られ、文献批判が徹底していなかったが、『法華文句』の吉藏疏への依存的関係が平井氏の研究によって徹底的に解明された。『法華経』に対する智顗疏と吉藏疏との関係についての画期的な研究であるので、やや詳しく紹介する。

本書の内容目次を紹介すると次のようである。

## 第一篇 序論 智顗と吉藏―経典註疏をめぐる諸問題

## 第一章 智顗の経典註疏と吉藏註疏

## 第二章 維摩経註疏をめぐる諸問題

## 第三章 『法華玄義』と『法華玄論』

## 第二篇 法華文句の成立と伝承に関する批判

## 第一章 『法華文句』の成立

## 第二章 『法華文句』のテキスト

## 第三章 經の科文に関する問題

## 第四章 『文句』四種釈と吉藏四種釈義

## 第五章 『文句』と『玄論』の引用文献

## 第六章 証真『法華疏私記』の吉藏闕説

## 第三篇 法華文句における吉藏註疏の引用

## 第一部 法華文句と法華玄論

## 第二部 法華文句と法華義疏

第一篇・第一章では、佐藤哲英氏の次のような研究を批判し、新しい見解を示している。智顗『金剛般若經疏』一卷は智顗の著作ではないと推定されるが、この智顗疏と吉藏『金剛般若疏』四巻とを比較すると、両疏には少なからぬ本文の一致が見出され、また、吉藏疏には智顗疏の文を指して「ある人」と呼び、批判しているので、吉藏疏の成立以前に智顗疏が存在していたこと、しかも吉藏疏では智顗疏の經典の段落分けを全面的に踏襲するほど重視しているので、智顗疏の本当の著者は吉藏に一目おかせるほどの人物であることが推定されるが、実際に誰なのかは容易に浮かび上がってこない、というものである。

これに対して、平井氏は、両疏の綿密な比較対照をなすことによって、吉藏疏の「ある人の説」を智顗疏が無断で借用

し、これをあたかも自説のごとく述べたものであることを論証し、あわせて智顗疏が全面的に吉藏疏に依拠し、これを参照し下敷きにして成立したものであることを論証した。これによって、智顗の撰述と言われてきた『金剛般若經疏』は佐藤哲英氏も認めるようにまったくの偽撰であること、しかし、実際の著者については佐藤哲英氏の説の吉藏以前の人物ではなく、吉藏以後の天台学徒であることが判明したのである。

第二章では、智顗の数少ない親撰書の代表格として重要視されてきた維摩經疏（『維摩經玄疏』六卷と、『維摩經文疏』二十八巻のうちの前三十五巻）は、智顗没後の翌年の五九八年に灌頂と普明の二人によって晋王広（後の煬帝）に献上されたものであり、一方、長安に入った吉藏が維摩經疏（『淨名玄論』八巻、『維摩經略疏』五巻、『維摩經義疏』六巻）を著わすのは、早くとも五九九年以降であるから、本来は智顗の維摩經疏に吉藏の維摩經疏の影響のあるはずなのである。しかし、智顗自らが維摩經疏に対する弟子の加筆補訂を期待している点があることや、長安における灌頂と吉藏の出会いの高い可能性などから、智顗の維摩經疏に吉藏疏の影響がある可能性があり、実際に両疏を比較対照すると、絶対数は少ないが、智顗疏が吉藏疏を参照した箇所を発見できるとする。このように、平井氏は、智顗の維摩經疏といえども、智顗の經疏の一般的傾向——吉藏疏の影響を受けているという傾向——を免れていないことを論証しようとしたのである。

第三章では、平井氏は、『法華玄義』という著作は、後世の天台の伝説に言うように、いつ、どこで、智顗が『法華玄義』の講説を行い、それを灌頂が筆録したとか、あるいは智顗の講説に灌頂が私見を加えた、などという性格のものではなくて、智顗の全く預かり知らぬところで、全篇これ灌頂が独自に創作し、自ら書き下ろした作品であるという疑いを強く持っていることを述べている。ただし、この疑いは『法華文句』については後に紹介するように十分に論証されたが、『法華玄義』については疑いにとどまっていて、十分な論証はなされていない。平井氏は、これまで、先学によって指摘されてきた『法華玄義』における『法華玄論』の影響の確認とともに、先学によって指摘されてこなかった平井氏の新たに発見した影響関係を論じている。具体的には、『法華玄義』の「体を顯わす」四項の中の第一項、「旧解を出す」の段が

『法華玄論』に基づいて執筆されている事実を論証している。これらの『法華玄論』の影響を受けた部分は、『法華玄義』全体のわずかな分量なので、上の疑いは十分な論証がなされていないと評さざるをえない。

第二篇・第一章では、平井は『法華文句』の成立に関する研究の結論を次のように整理している。

灌頂は二十七歳のとき（五八七年）、金陵（建業）で智顗の『法華經』の講説を一回だけ聞いたことがあり、その後、六十九歳のとき（六二九年）、その記録を添削して、『法華文句』が成立したと自ら述べている。ところが、現行の『法華文句』は『法華玄義』と比較にならないほど、吉藏の『法華玄論』『法華義疏』に依拠し、これを下敷きに書かれている箇所が多い。しかも、『法華文句』の発表は六二九年であって、『法華玄義』の成立よりもかなり遅いこと、また、灌頂が添削した『法華文句』のテキストが、左溪玄朗（六七三―七五四）が再治しなければならないほど錯乱していたことが分かっている。

平井氏は、このような事実から、稀に見る革命的な実践家であった智顗の『法華經』の講説は達意的、玄義的なものであり、經文の逐次的な解釈はむしろ伝統的な講經家の常であって、智顗はこのような講經家とは対蹠的な立場にあったはずであると推定し、したがって、実際には、經文の逐次的な講説というものは智顗にあっては行なわれていなかったか、仮りにあったとしても、きわめて不完全なものであったのではないかと推定している。もし、そうであるならば、『法華文句』の成立が大幅に遅れたことや、吉藏疏の影響を大きく受けていることの理由が説明できるとされる。さらに、『法華文句』の発表が遅れたのは、『法華文句』が全面的に依拠している『法華玄論』『法華義疏』の著者である吉藏の死（六三三年）を待っての発表であったのではないかと推定している。

また、灌頂が『法華文句』を執筆した動機について、平井は、類稀なる革命的な実践家であった智顗に、さらに伝統的な經典注釈家としての地位を付与しようとする、灌頂の智顗顕彰の悲願を見て取っている。

さらに、第二章では、灌頂自身の書き下ろした部分も現行の『法華文句』の一部にすぎず、さらに時代を下って、後世

の学者によって加筆増広されたかもしれないことを推定している。

第二章では、『大正新脩大藏經』所収の『法華文句』の底本である明本を底本とし、その対校本である法隆寺本と、平安時代初期の写本と推定される旧石山寺藏本（巻第一の一巻のみ現存）の『法華文句』とを対校本として、改めて巻第一の本文を校訂した資料を掲載している。

第三章では、『法華文句』に説かれる『法華經』の分科（全体を本門と迹門とに分け、さらにそれぞれを序・正・流通の三段に分ける）が智顗の講説に基づくものではなく、灌頂が吉藏の『法華義疏』を参照して新たに作った説であろうと推定し、内容的にも吉藏の分科ほど論理的整合性がないと批評している。

第四章では、『法華文句』の因縁釈・約教釈・本迹釈・観心釈の四種釈は、經典解釈の方法として何らの普遍性も妥当性も持っておらず、このような解釈方法の基本的な理念が吉藏の四種釈である随名釈（別名は依名釈義。普通の辞書的な解釈方法）・因縁釈（別名は互相釈義。ある概念が他の概念と相對關係にあることを説いて、両者が相即關係にあることを認識させる解釈方法）・理教釈（別名は理教釈義。概念によって概念的把握を越えた理を示す解釈方法）・無方釈（理の立場に立つて理の自在な働きを認識する解釈方法）と類似している点を考慮すると、灌頂が吉藏の影響を受けて作った解釈方法である可能性があると推定している。

第五章では、『法華文句』と『法華玄論』の引用文献を比較対照し、両者に共通するものが少なくないこと、經論の同一箇所を引く例も多数見られることを指摘し、これも『法華文句』が『法華玄論』を参照している理由に基づくのではないかと推定している。

第六章では、日本の宝地房証真（十二世紀―十三世紀初め）の『法華疏私記』は吉藏の『法華玄論』を参照しており、妙樂大師湛然（七二一―七八二）の『法華文句記』が『法華玄論』を参照しなかったために起こした誤った解釈を厳しく批判していることを指摘している。

第三篇は本書の中心部分であり、第一部では、『法華文句』と『法華玄論』との類似箇所を対照し、『法華文句』が『法華玄論』を下敷きに執筆されたものであることを論証し、第二部では、『法華文句』と『法華義疏』との類似箇所を対照し、『法華文句』が『法華玄論』ほどではないが、『法華義疏』をも参照している事実を論証している。

本書の研究によって、智顗の『法華文句』を研究する場合は、吉蔵の法華疏との厳密な比較対照を経なければならぬことになったが、『法華文句』が下敷きにした吉蔵の法華疏のすべての資料が提示されているので、非常に便利である。

(11) 多田孝正『法華玄義』（大蔵出版、一九八五年）

本書は『法華玄義』の巻第一の原文・訓読文・現代語訳・注を掲載し、あわせて解説を試みたものである。

(12) 村中祐生『天台觀門の基調』（山喜房仏書林、一九八六年）

本書は論文集であり、本稿の主題に関連する論文は、主として吉蔵の法華經疏を研究した次の論文である。

- 1 嘉祥大師「二蔵」義の成立考
- 2 嘉祥大師の教判思想
- 3 嘉祥大師における教判思想の展開
- 4 嘉祥大師の諸經疏の撰修について

(13) 平井俊榮『法華玄論の註釈的研究』（春秋社、一九八七年）

本書は吉蔵の『法華玄論』を研究したものである。第一篇の「研究篇」は五章から成る。

「第一章 法華玄論の成立」は、吉蔵以前の法華經研究史の概説と『法華玄論』における吉蔵の注釈の態度・方法につ



いて整理したものである。

「第二章 法華玄論と法華義記」は、『法華玄論』における法雲の『法華義記』批判を主題としたものであり、とくに法雲の因果二門説（『法華経』の前半が因を明かし、後半が果を明かすとする説）と、『法華経』の仏身が無常である説とに対する吉蔵の批判を概説している。

「第三章 法華玄論の流伝」は、日本の三論宗における『法華玄論』の流伝についての研究である。

「第四章 法華玄論と後世の法華註疏」は、元暁の『法華宗要』、基の『法華玄賛』、聖徳太子の『法華義疏』における『法華玄論』の影響を研究したものである。

「第五章 法華玄論のテキスト」は、『法華玄論』のいくつかの写本についての解説である。

本書の第二篇は「訳注篇」であり、『法華玄論』十巻のうち、第四巻までの原文、訓読、注が掲載されており、とくに注における経論の出典の明示は労作であり、後の研究者にとって非常に便利である。

(14) Paul L. Swanson. *Foundation of T'ien-t'ai Philosophy*. Berkeley: Asian Humanities Press, 1989.

本書には『法華玄義』の一部の英訳と注を含んでいる。巻第一下の途中（大正三三・六九一上）から巻第二下の末尾（同前・七〇五中）までの範囲である。

(15) Young-ho Kim. *Tao-sheng's Commentary on the Lotus Sutra: A study and Translation*. Albany: State University of New York Press, 1990.

本書は竺道生の法華経疏の研究と英訳・注から成る。道生の法華経疏の現代語訳は日本にもまだないので、現代語訳は本書が初めての試みである。日本では、『三康文化研究所年報』九号（一九七六年）・一二号（一九七九年）に訓読文が掲載

されている。また、一字索引が最近、奥野光賢・晴山俊英の両氏によって発表された（私家版、一九九二年七月）。本書の内容目次を紹介する。

Part I: Introduction

Chapter 1. Tao-sheng's Prehistory: The State of Buddhist Studies in China

Chapter 2. Tao-sheng's Biography

Chapter 3. Tao-sheng's Works

Chapter 4. Tao-sheng's Doctrines

Chapter 5. Tao-sheng's Influence and the Impact of His Doctrines

Part II: A Critical Study of Tao-sheng's Commentary on the *Lotus Sutra*

Chapter 6. Tao-sheng and the *Saddharmapuṇḍarīka*

Chapter 7. Literary Aspects

Chapter 8. Central Ideas

Chapter 9. Traces of Tao-sheng's Doctrines

Chapter 10. Conclusions

Part III: Translation

(16) 菅野博史『法華とは何か——『法華遊意』を読む——』（春秋社、一九九二年）

本書は吉蔵の『法華遊意』全文の現代語訳・訓読文・注を記し、あわせて内容の解説を試みたものである。

(17) 菅野博史『中国法華思想の研究』(春秋社、一九九三年)

本書は筆者の従来の中国における法華経疏の研究をまとめたものである。道生、法雲、吉蔵の法華経疏を中心資料としており、智顗・灌頂の『法華文句』『法華玄義』にはわずかに関説するところがある。以下、内容目次を紹介する。

序論 本書の構成

第一篇 吉蔵以前の法華経疏の研究

第一章 鳩摩羅什・慧観・僧叡の法華経観

第二章 道生『妙法蓮花経疏』の研究

序

第一節 道生における法華経の構成把握

第二節 『妙法蓮花経疏』における道生の経典注釈の方法

第三節 道生における機と感応

第四節 『妙法蓮花経疏』における「理」の概念

第三章 劉虬撰『注法華経』の逸文

第四章 法雲『法華義記』の研究

序

第一節 『法華義記』における講義者法雲と筆録者

第二節 『法華義記』冒頭の総合的解釈の考察

第三節 『法華義記』における一乗思想の解釈―権実二智論と因果論―

第四節 法雲『法華義記』と敦煌写本『法華義記』との比較研究

第五章 慧思『法華經安樂行義』の研究

第二篇 吉蔵の法華經疏の研究

第一章 吉蔵の法華經疏の基礎的研究

序

第一節 吉蔵の法華經疏の成立順序

第二節 吉蔵の法華經疏の概観

第三節 『法華統略』釈序品の研究

第二章 吉蔵の教判思想と法華經観

序

第一節 吉蔵の經典観

第二節 吉蔵における三種法輪説

第三節 吉蔵における四調柔

第四節 吉蔵における直往菩薩と廻小入大菩薩

第五節 吉蔵における『法華經』と諸大乘經典との比較研究

第六節 吉蔵における『法華經』と仏性

第七節 吉蔵における『法華經』の宗旨観

第三章 經題「妙法蓮華經」の解釈

序

第一節 「妙」の解釈

## 第二節「法」の解釈と仏身常住説

### 第三節「蓮華」の解釈

### 第三篇『法華経』信解品の譬喩解釈と教判思想

#### 序

#### 第一章 道生『妙法蓮花経疏』において

#### 第二章 法雲『法華義記』において

#### 第三章 吉蔵の法華経疏において

##### 第一節『法華玄論』において

##### 第二節『法華義疏』において

##### 第三節『法華統略』において

#### 第四章 智顗・灌頂『法華文句』において

本書は右のように、三篇十二章から構成される。

第一篇「吉蔵以前の法華経疏の研究」は、吉蔵以前に成立した法華経疏を主として研究したものである。前述のとおり、智顗・灌頂の『法華玄義』『法華文句』は吉蔵の法華経疏の影響下に成立したものである。また、鳩摩羅什、慧観、僧叡、慧思はいわゆる法華経疏を著わしているわけではないが、彼らの法華経観を探索する資料が現存しているので、それらの資料を用いて考察した。

本篇は五章から構成される。

第一章「鳩摩羅什・慧観・僧叡の法華経観」においては、鳩摩羅什と廬山慧遠との問答を編集した『大乘大義章』に鳩

摩羅什の法華經觀を採る資料が若干残っているもので、それについて考察し、また、鳩摩羅什の門下の中の慧觀は『法華宗要序』を著わし、僧叡は『法華經後序』を著わしているもので、それらを通して、彼らの法華經觀を明らかにした。

第二章「道生『妙法蓮花經疏』の研究」は、次の四節から構成される。

第一節「道生における『法華經』の構成把握」においては、道生の法華經觀を明らかにするための重要な条件として、道生が『法華經』二十七品の構成をどのように把握しているかを考察したものである。道生は、各品の随文解釈に入る前に、その品の一經全体における位置づけ、存在意義について叙述しているので、その道生の叙述に着目し、それを主要な資料として道生が『法華經』の構成をどのように理解していたかを考察した。

第二節「『妙法蓮花經疏』における道生の經典注釈の方法」においては、中国において発展した經疏の歴史的発展を視野に入れ、『妙法蓮花經疏』に見られる注釈の方法を解明し、後代の經疏との比較研究を遂行するための基礎作業を行なった。本節では、「来意」に相当する部分の存在、分科、經文の標出、音写語の解釈、異説の提示などの注釈の形式的な側面について整理を加え、次に、偈頌についての解釈方法の特色について考察し、最後に、道生の經典解釈の基本的立場、理論的枠組みについて検討した。

第三節「道生における機と感應」においては、道生の經典注釈の理論的枠組みとして重要な「機」について「感應思想」との関連の中で考察した。本節において、中国仏教において成立した仏教用語としての「機」は、仏・菩薩の応現・教化を發動させ、かつそれを受け止める衆生の側の構え、あり方の意であることを明らかにした。

第四節「『妙法蓮花經疏』における「理」の概念」においては、道生の經典注釈の理論的枠組みとして重要な「理」の概念について考察した。また、道生の現存する『法華經』『維摩經』『涅槃經』に対する注における「理」のすべての用例集を作成した。

第三章「劉虬撰『注法華經』の逸文」においては、南齊の在家の仏教信者であった劉虬が編纂した『注法華經』の逸文

を集めたものである。『注法華經』は現存しないが、幸いに吉蔵の法華經疏におよそ五十回ほど引用されているので、逸文集を作成するとともに、その思想の一端を考察した。

第四章「法雲『法華義記』の研究」は、次の四節から構成される。

第一節「『法華義記』における講義者法雲と筆録者」においては、法雲、および法雲の学系に伝わる学説が『法華義記』においてどのように扱われているのかを検討し、それによって、『法華義記』がたんに法雲の講義をそのまま筆録したのではなく、実際に『法華義記』を執筆した弟子が、法雲の説に基づきながらも自分なりの注釈の工夫を凝らした跡を認めることができることを論じた。

第二節「『法華義記』冒頭の総合的解釈の考察」においては、法雲の法華經観を最も総合的に示した『法華義記』冒頭の部分について、全文の訳を示し、論評を加えながら、法雲の教判思想、経題釈、分科について考察した。

第三節「『法華義記』における一乗思想の解釈―権実二智論と因果論―」においては、『法華經』の中心思想の一つである方便品の一乗思想について、法雲が独自に形成した解釈の枠組みである権実二智論と因果論を用いてどのように理解したかを、序品と方便品に対する注釈を中心的資料として考察した。

第四節「法雲『法華義記』と敦煌写本『法華義記』との比較研究」においては、法雲の『法華義記』と敦煌写本『法華義記』（スタイン本「S二七三三」と「S四一〇二」）とについて、両者の教判思想の相違を考察し、注釈の形式・方法などについていくつかの項目を設けて両者の比較を試みた。

第五章「慧思『法華經安樂行義』の研究」においては、『法華經』の安樂行という特殊な思想的題目を扱った『法華經安樂行義』を資料として、慧思の法華經観を考察する。

第二篇「吉蔵の法華經疏の研究」は、中国において最も多くの法華經疏を著わし、しかも灌頂を介して『法華玄義』『法華文句』に深く影響を与えた吉蔵の法華經疏を研究するものである。吉蔵の法華經疏には、『法華玄論』十卷、『法華

義疏』十二卷、『法華遊意』二卷（または一卷）、『法華統略』六卷があり、また、天親造・菩提留支訳『妙法蓮華經憂波提舍』に対する注釈書として『法華論疏』三巻がある。

本篇は三章から構成される。

第一章「吉蔵の法華經疏の基礎的研究」は、次の三節から構成される。

第一節「吉蔵の法華經疏の成立順序」においては、『法華論疏』を含めた五部の書の成立順序を考察し、とくに『法華論疏』『法華統略』の順に成立したとする従来の学説を批判し、『法華統略』『法華論疏』の順に成立したことを論証した。

第二節「吉蔵の法華經疏の概観」においては、吉蔵の四部の法華經疏について、その構成、特色、従来の文献学的研究成果などについて簡潔に概観した。

第三節『法華統略』釈序品の研究』においては、吉蔵最後の法華經疏である『法華統略』は従来あまり研究されてこなかったため、釈序品を資料として、『法華義疏』には見られなかった『法華統略』の新しい『法華經』解釈を考察した。とくに、「如是我聞」の解釈に見られる無生観について考察し、また、『法華經』の思想をさまざまな視点から整理した、一義・二義・三義・四義・七義・十義・十二義について考察した。

第二章「吉蔵の教判思想と法華經観」は、次の七節から構成される。

第一節「吉蔵の經典観」においては、大乘經典は道を顕わすことにおいて平等であるとする吉蔵の主張を確認し、小乗經典はなぜ除外されるのか、多くの大乘經典が平等であるならば、なぜ多くの經典が存在するのか、などの問題への吉蔵の解答を考察した。

第二節「吉蔵における三種法輪説」においては、大乘經典の価値的平等性を主張する立場から、主として『華嚴經』と『法華經』の価値的平等性を立証するために考案された一種の教判思想が三種法輪（根本法輪・枝末法輪・撰末帰本法輪）説であること、三種法輪説の形成過程や、三種法輪をめぐる思想的な諸問題を考察した。



第三節「吉蔵における四調柔」においては、吉蔵は『華嚴經』以後、『法華經』以前の小乗、大乘の經教（人天教・二乗教・自教・他教の四種に整理される）を声聞の機根を調柔するものと捉え、これを四調柔と呼んでいるので、この概念の意義やその概念の形成過程を考察した。

第四節「吉蔵における直往菩薩と廻小入大菩薩」においては、吉蔵における直往菩薩（本来菩薩であるもの）と廻小入大菩薩（声聞が『法華經』に至って菩薩に転換したもの）の二種類の菩薩の概念の形成過程、思想的意義を明らかにした。

第五節「『法華經』と諸大乘經典との比較研究」においては、吉蔵が試みた『法華經』を中心とする『華嚴經』『般若經』『涅槃經』『勝鬘經』との個別的な比較研究を考察した。これは、大乘經典に価値的な差別を設ける頓漸五時教判に対する吉蔵の具体的な批判について論じたものである。

第六節「吉蔵における『法華經』と仏性」においては、『涅槃經』の独説とされる仏性が『法華經』にも説かれると主張する吉蔵の論証方法を考察した。これは吉蔵における『法華經』と『涅槃經』との比較研究を考察するものでもある。

第七節「吉蔵における『法華經』の宗旨観」においては、『法華經』の宗旨（根本思想）が何であるかについて、旧来の學説に対する吉蔵の批判を考察し、あわせて吉蔵の思惟の基本的特色を考察した。

第三章「經題『妙法蓮華經』の解釈」は、『法華經』の經題である「妙法蓮華經」についての吉蔵の解釈を考察したものである。經題の解釈は中国の經疏の重要な部分である。次の三節から構成される。

第一節「『妙』の解釈」においては、鳩摩羅什訳の『妙法蓮華經』と竺法護訳の『正法華經』との訳語上の相違点、すなわち、「妙」と「正」とに対する吉蔵の比較研究を考察した。また、吉蔵における相待妙・絶待妙について考察し、さらに智顗・灌頂の『法華玄義』における相待妙・絶待妙との関係について考察した。

第二節「『法』の解釈と仏身常住説」においては、經題の「法」の解釈の中で展開される代表的な議論、すなわち、法雲の法華無常説（『法華經』の仏身は無常であるとする説）に対する吉蔵の批判の内容を考察した。これは『涅槃經』の独説

とされる仏身常住説が『法華經』にも説かれると主張する吉蔵の論証方法を考察するもので、吉蔵における『法華經』と『涅槃經』との比較研究を考察したものでもある。

第三節「蓮華」の解釈においては、経題の「蓮華」の解釈を考察した。

第三篇「法華經」信解品の譬喻解釈と教判思想」は、信解品の窮子の譬喻が中国の教判思想の形成に果たした役割りを考察するものである。『法華經』は吉蔵によれば、釈尊の一代の教化を一乗→三乗→一乗に整理している。中国ではこの『法華經』の思想が教判の一つの基準を提供した。しかし、この図式だけでは、小乗と大乘の関係、より多部の大乘經典の間の相互関係など理解できないので、窮子（声聞を譬える）に対する詳しい段階的な教化を説く信解品の譬喻が着目されたのである。多くの法華經疏が、この譬喻の解釈の中で、最も詳細な教判思想を展開している理由がここに存するのである。また、本篇は、前二篇で考察した法華經疏の注釈の実態がどのようなものであるかを明らかにすることにもなったはずである。第一章において道生、第二章において法雲、第三章において吉蔵、第四章において智顗・灌頂の法華經疏を取り挙げて考察する。とくに、第三章の吉蔵においては、第一節で『法華玄論』、第二節で『法華義疏』、第三節で『法華統略』の解釈を考察した。

以上、中国の法華經疏に対する研究の中で、単行本として発表されている代表的なものを紹介した。最後に、代表的な法華經疏の訳注研究の現状について付言しておく。

道生の法華經疏についてはすでに紹介したように、英訳、一字索引が発表されている。法雲『法華義記』についてはまだ訓読文も発表されていない。吉蔵疏や智顗疏に対する影響の大きさから言っても、訳注研究が待望される。『法華文句』については訓読文が発表されているだけである。『法華玄義』は訓読文が発表されているほかに、すでに紹介したように巻第一の現代語訳・注が発表され、また巻第一下の途中から巻第二下までの英訳が発表されている。吉蔵の『法華玄論』

についてはすでに紹介したように、巻第四までの訓読・注が発表されている。『法華義疏』については、訓読文が発表されている。『法華遊意』についてはすでに紹介したように、現代語訳・訓読文・注が発表されている。『法華統略』については、まだ訓読文さえ発表されず、吉蔵の法華経疏の中でも最も研究が遅れている。いずれにしろ、文献学的研究の柱として、それぞれの法華経疏の現代語訳・注・索引の作成が望まれる。

なお、中国における法華経疏に対する研究論文は多数発表されているが、本稿では割愛せざるをえない。近年、日本では、吉蔵の法華経疏に対する研究が盛んであるが、それらの論文については、平井俊榮監修『三論教学の研究』（春秋社、一九九〇年）の末尾に付されている論文目録を参照されたい。

〔付記〕 本稿の内容のうち、(17)を除いた部分については、左の雑誌に英訳が掲載されている。

Kanno Hiroshi, "An Overview of Research on Chinese Commentaries of the Lotus Sutra," ACTA ASIATICA 66, 1994. 1.

〔追記〕 本稿の校正中に、奥野光賢編『法華遊意一字索引』（一九九三年十二月）が刊行された。